

『白崖宝生の研究』

A Study of Byakugai-Houshou

鈴木省訓

臨濟禪は、公案を用いた看話禪であることは周知のことである。この公案は、古則公案と言われるように、歴代の祖師方の示した機縁、機語である。現在の臨濟禪で用いられている公案は、白隠及び白隠の弟子達、或は、白隠下の禅匠によって整理され、体系化されたものである。この体系は、現在も臨濟禪の修行の場である室内において守られている。この禪の体系及び公案の見処（見解）は、白隠及び白隠下によって構築されたものである。五山派の活潑な時代であった室町から江戸時代初期に流行した密参禪とは、多くの違いがあると言われる。これら密参禪と現在の白隠禪の違いについても研究すべきものがあると考ええる。この違いについては、白隠下の室内における公案のほとんどを見た人、つまり、白隠下の公案をほとんど終らせた位の人でなければ研究することができないのではないかと考えられている。ともあれ、鎌倉・室町時代と江戸中期以降、特に白隠の出世を境としての対比研究は、臨濟禪研究には不可欠のことである。

この公案のやりとりのほとんどが、問答によって成り立っている。

問答が臨濟禪の中心であるとも言えるのではないか。今日に於ても、室内をはじめとし、その他の場所でも多くの問答が行なわれている。しかし、今日の問答は、その多くが形式的なものになって、実際には、形骸化されたものであると思っている。この禪の問答が形式的になったのは、近年のことであると考ええる。これは、白隠禅というより、日本の臨濟禪の内部にその原因があると思う。

臨濟禪における問答は、現在、立班垂示式、晋山の時の山門問答、そして、公案禪の室内の中で行なわれている。この室内以外の問答は完全に形式的なものである。室内での問答のみが活潑な、生きた問答であると言える。しかし、ある一面から見れば、室内における問答も形式的であるとも言えるのである。

この問答が形式化する以前のことについて、玉村竹二氏の著書『臨濟宗史』の中に収められている「第二十二話 中世から近世への移りかわり」の中に、密参禪について述べ、さらに、

一番良い例としては、応永初年に、上野の泉龍寺（現円覚寺派）の

開山で幻住派大拙祖能の法嗣である白崖宝生という人がいたが、この人には偶然にも語録が残っている。その語録すべて、参禅した雲水達との問答応酬の記録になっている。この語録の写しが東京大学史料編纂所にある。『大日本史料』応永二十一年（二四一四）九月七日条に白崖の伝記が所収されている。それを見ると、林下の参禅の方法が、かなり具体的に想像できるようなところがあるのである。つまり林下には、大徳寺・妙心寺のような五山に近い上堂中心の叢林風な寺院もあったが、田舎ではこのような活気のある状態もあり、これが、いわゆる林下の本質であつたのではないかと思われる。とある。

つまり、今日のような形式化されたものではない、本来の禅問答が活発に行なわれていた記録が、白崖宝生の伝及び語録の中にあると言うのである。そこで、この語録によって、生きた禅問答について見ることにする。

更に、白崖宝生は、幻住派に属する禅匠である。そこには、幻住派の特徴をも示されているのではないかと考える。

そこで、今回より、白崖宝生の伝記及び語録に訓註を施しながら、幻住派の禅問答について見てゆくことにする。

第一資料 白崖宝生の伝記

七日、丁未、上野泉龍寺・武藏圓福寺・越後關興庵等開山寶生白寂ス、

〔白崖禪語錄〕○越後關興寺本

最上山關興禪庵開山普覺圓光禪師傳白崖寶生大和尚傳

師諱寶生、號白崖、河陽橘氏子也、世爲名族、眉目清秀、風姿閑雅、和氣可掬、沒齒未見有慍色、初在俗、凡世伎莫不皆善、最長歌詞騎射、而自七齡不樂涉世、

七日、丁未、上野泉龍寺・武藏圓福寺・越後關興庵等、開山、宝生（白崖）寂ス。⁽¹⁾

〔白崖禪師語錄〕○越後、關興寺本

最上山關興禪庵開山、普覺圓光禪師傳、白崖宝生大和尚伝

(一) 誕生

師、諱は宝生、白崖と号す。河陽の橘氏の子なり。世に名族と爲す。⁽³⁾眉目清秀、風姿閑雅、⁽⁴⁾没齒より未だ慍色有ることを見ず。初め、俗に在つて、凡そ世伎、皆な善しとせざることなし。最も歌詞・騎射に長ず。而して七齡自り涉世を樂します。⁽⁶⁾

(1) 応永二十一年九月七日の頃。西暦一四一四年。

(2) 上野泉龍寺（群馬県伊勢崎市）現在は円覚寺派に属す。武蔵円福寺

（埼玉県秩父市）大宝山円福寺。現在は南禅寺派に属す。越後關興

庵（新潟県南魚沼郡）現在は、關興寺となり円覚寺派に属す。

(3) 名高い家から。名門のこと。 (4) 顔たちが清く秀いでること。

(5) 身なり、姿がもの静かで見やびであること。

(6) 男子八才の齒のはえかわる年をいう。

(7) むっとした顔つき。 (8) 世事を経験する。世をくらし過す。

(二) 出家

先冠往紀之金剛峰求出家、禿坂逢一龐眉雪頂僧、年可八耄、問曰、子何爲人、師云、吾求離塵、特入茲山、僧曰、愛線牽強、佛道曠遠、無猛利大心、焉能行難行、若求真出難、宜入禪門、毋滯于此、相揖別去、訪山中舊識而薙染、即日求師、游方至相陽、

先冠、⁽¹⁾紀の金剛峯に往き、出家を求む。禿坂で一龐眉雪頂の僧に逢う。年、八耄⁽³⁾ばかり。問うて曰く「子、何んぞ人の爲にす。」師曰く「吾れ離塵を求めて、特に茲の山に入る。」僧曰く「愛線⁽⁴⁾は牽強、仏道は曠遠、猛利⁽⁶⁾の大大心無ければ、焉んぞ、能く行ずるも行じ難し。若し真の出離を求めば、宜しく禪門に入るべし。此に滞ること母れ。」相揖⁽⁷⁾して別れ去る。山中の旧識を訪ねて薙染す。即ち、日に師を求め、游方⁽⁸⁾して相陽に至る。

(1) 和歌山県、金剛峯寺。

(2) 大きなまゆと白髪。老人の形容。

(3) 八十才の老人。

(4) 愛欲・煩惱は、なかなか断ちがたい。

(5) 仏法の修行は、広大無辺である。

(6) たけだけしい。勇猛。

(7) えしゃく、会釈。

(8) 相模の国、神奈川県。

(三) 清隱寺の至一に参ず

依清隱寺至一^(溪雲)登具、一也有奇行、能以咒力役飛走涌水泉、而師心小之、

清隱寺の至一⁽¹⁾に依つて登具す。一、也た奇行有り。能く咒力を以つて飛走を役^{つか}い、水泉を涌す。而して師の心、之を小とす。

(1) 溪雲至一(不詳)

(四) 安房、清澄山の虚空蔵菩薩に参詣す。

詣房州清澄虚空蔵、祈求因縁三七日矣、適有一僧同宿、似有半面之識^(通)、而不明記之、僧云、子非禿坂邂逅者耶、熟視則嚮龐眉老也、云、子既入禪、惟正師難遭爾、近江飯山^(通)有寂室翁^(元光)、亟行、莫後、

房州⁽¹⁾の清澄の虚空像に詣す。因縁を祈求すること三七日。適々、一僧有りて同宿す。半面の識有るに似る。而して之を記すに明らかならず。僧云く「子、禿坂の邂逅の者に非ずや。」熟視すれば、則ち龐眉老に嚮^{むか}うなり。云く、「子、既に禪に入る。惟だ正師に遭い難きのみ。近江⁽²⁾の飯山⁽³⁾に寂室翁有り。亟^{すまや}かに行き、後れること莫れ。」

(1) 千葉県。 (2) 滋賀県。

(3) 寂室元光(一二九〇—一三六九) 臨濟宗。岡山県高田の人。号は寂室。俗姓は藤原。十三才で出家し、山城の三聖寺の無為昭元に随い、後に受具す。十六才、相模の禪興寺の約翁徳儉について修行す。元応二年(一二三〇)可翁宗然・鈍庵俊等と入元し、天目山の中峰明本に謁し、ついで元叟行端・古林清茂・清拙正澄・靈石如芝・絶学世誠・無見先観・断崖了義等に参じ、嘉暦元年(一二二六)に帰朝。

建武元年（一二三四）備後の永徳寺の開山に請わる。後、俗喧を避け、美作・三備の間に二十五年幽居したが、観応二年（一二五一）摂津の福嚴寺、ついで近江の往生寺に住し、康安二年（一二六二）近江の国生、佐々木氏頼の請によつて永源寺の開山となる。貞治六年九月一日示寂。世寿七十八。法臘六十三。応永二年（一三九五）円応禪師と諡される。

(五) 永源寺の元光に参ず

師不待旦而乃發西^(方)、扣永源^(寂室元光)之門、室屢示達道捷徑、二十一、以事赴河陽、道河野、聞風憂竹聲、恍然有省、即還告室、々云、汝後生宜保任、以成其器、慎勿造次、巾侍四年、室順世、

師、旦を待たずして西に發つ。永源の門を扣く。室、屢々達道の捷徑を示す。二十一、事を以て河陽に赴く。道は吉野、風の竹を憂る^{おと}聲を聞いて、恍然として省有り。即ち還つて室に告ぐ。室云く「汝、後生は、宜しく保任⁽⁴⁾し、以て其の器を成すべし。慎んで造次⁽⁵⁾すること勿れ。」巾侍すること四年、室順世す。

- (1) 寂室元光 (2) 近道、早道 (3) 河内、大阪府
(4) 保護任持の略。おのれのものとして大事にすること。
(5) あわただしいこと。

(六) 円心に参ず

適々、越後の月堂⁽¹⁾に見ゆ。歳余にして、堂亦た化す。悵然⁽²⁾として所依を失す。

適越後、見月堂^(圓心)歳餘、堂亦化、悵然失所依、

時明鑑(重題)大拙師、號、爲法入元、明鑑三十歲也、大元朝至正三年甲辰也、受伏龍衣、(元長)(待)而還止于上野利根吉祥、明鑑五十二、貞治三年甲辰也、解悟文才、海美之望也、(所、下同之)師聞其道韻、想醉生液、遂躡履就之、以質前解、拙云、警轉一機、爾即不無、惟自不爲耳、欲謝人事而專所修、時廣澤有信士、施供雲衲、一見師以爲有異標、結爲施主、於是師陳昔志、士乃於屏處築特室、以居之、師於室中安一碁局、跏趺於上、髮爪不煎、(剪)戶限不踰者三禩、士告以大拙赴圓覺○圓福寺本、建長二年、之請、師欣然始出中路候拙、不契、滋尋深、

(1)月堂円心(不詳)室町末期の人。播磨の人。号は月堂。幼にして美濃の明禪寺の曇溪に参じ祝髮受戒す。後、法雲寺の無雲義天に参じて契悟す。後、建仁寺の聞溪良聰、東福寺の特峰奇、愚中周及に参ず。更に建仁寺の真巖古に参じて板首となる。美濃妙勝寺に住し、移つて越前の竜溪寺を董す。晩年、近江の智海寺に住し、示寂す。

(2)うらみなげくさま、がっかりしたさま。

(七) 上野、吉禪寺の祖能に参ず

時に明鑑(1)(大拙師、広円明鑑と号す)法の為に元に入る、(明鑑三十歳なり、大元朝の至正四年、本朝の康永三年なり)伏龍の衣を受く。(千岩師、伏龍山に住す)而還、上野の利根の吉祥に止まる。(明鑑の歳五十二、貞治三年甲辰なり)解悟文才は海内の望なり。師、其の道韻を聞き、醉を想つて液を生ず。遂に履を躡き、之に就き、以て前解を質す。拙云く「一機を警転するも、爾は即ち無ならず、惟だ自ら為さざるのみ、人事を謝けて、専ち所修せんと欲す。時に広沢に信士有つて、雲衲に施供す。師一見して以て異標有るが為に、結して施主と為す。是に於て、師、其の志を陳ぶ。士乃ち屏処に於て特に室を築き、以て之に居す。師、室中に於て一碁局を安んじ、上に跏趺す。髮爪は剪らず、戸限踰えざること三禩。士、似て、大拙の円覺(4)の請に赴くを告げる。師、欣然として始めて出づ。中路、拙に候(うかが)う。契わず、滋々尋深す。

(1)大拙祖能(一二三三—一二三七)臨濟宗。相模(神奈川県)鎌倉の人。

善福寺大川道通について得度、後、延暦寺にて受具す。十七才、東福寺の双峰宗源に参じ、再び大川に侍し、鎌倉大慶寺より円覚に移った大川に随い、参じて記室に司る。後、天外志高について侍香となる。更に東明慧日、夢窓疎石等に参じ、康永三年(一二三四)に元に渡り、無言承宣、東陽徳輝に参じ、次いで伏竜山の千巖元長に参じ、一夜五更に至って惣然大悟する。千巖は、中峰以来の法衣を付す。その後、諸師に歴参し、千巖の寂後、帰朝す。ここに肥後(熊本)永徳寺に住し、更に筑前(福岡)顕光寺、豊後(大分)天目、万寿に住し、上野(群馬)の吉祥寺を董す。上野に宝林寺、武蔵に歓喜寺を構えて一世となる。後に、円覚寺、建長寺に住す。永和三年八月二十日、円覚寺青松庵にて寂す。世寿六十五、法臘五十二。青松庵に塔す。敕して広円明鑑禅師に諡す。

(2)明鑑三十歳なりとあるが、康永三年は、大拙祖能が三十二歳の年である。

(3)千岩元長(一二八四—一二五七)臨濟宗。字は無明。越州(浙江省)蕭山の人。俗姓は董氏。七才で富陽(浙江省)の法門院に入り、十九才で出家受具す。武林山靈芝寺で戒律を学び、後、中峰明本の法を嗣ぐ。伏竜山無明寺に出世す。至正十七年六月十四日示寂す。世寿七十四。法臘五十六。

(4)円覚が、円福寺本では建長となっている。円覚寺及び建長寺の世代を見ると、円覚寺四十世、建長寺四十九世となっている。しかし、建長寺に住した年代は、大拙祖能の示寂後になっている。何故にこ

のような記載がなされているかは調べる必要があると思う。

(八) 下野、日光山に入る

入下野日光山、去城四十里、極險絶、山頂有湖、周圍又四十里、於湖側結茅屋一間、自誓日、不明大法、不下此山、一日向曉煮粥、欲喫、忘其已焦、滿鑊通紅、破裂作聲、倏奔所證、時年三十一、

下野の日光山に入る。城を去ること四十里、極めて險絶す。山頂に湖有り。周圍四十里。湖の側に於て茅屋一間を結ぶ。自ら誓つて曰く「大法を明らめずんば、此の山を下らず。」一日、曉に向つて粥を煮て喫せんと欲す。其れの己に焦げるを忘す。鑊に紅を通して満し、破裂して^{おと}作す。師、證する所を棄てる。時に年三十一。⁽²⁾

(1) 栃木県 (2) 応安七年(一二七四)

(九) 円覚寺で祖能の印可を受ける

束包下山、入瑞鹿^(圓覺寺)巨福^{〇圓福寺本、作ル}、見大拙、々云、僮有徹底、試舉看、師曰、作夢者與作寐話者、是同耶是別耶、拙云、作夢底且置、作麼生是寐語底、師云、某甲道不著、拙曰、從上祖宗、皆說悟底、僮何不道、師云、請和尚伐某甲道、拙云、山僧道不著、師曰、恁麼則與某甲一般也、拙云、既是一般、爲甚麼山僧不育僮^(音)、師曰、知音無消息、拙斬渠語曰、鼻祖降生歷代傳法者、保重斯道、滔山谷、動三二十年、霜露果熟、龍天推出、吾去後一十三年、厚自韜韞、勿開法也、

包を束ねて山を下り、瑞鹿⁽¹⁾に入り、大拙に見ゆ。拙云く「僮、徹底すること有り。試みに拏せ、看ん。」師曰く「夢を作す者と、寐語⁽²⁾を作す者と、是れ同か、是れ別か。」師云く「道不著⁽³⁾。」拙曰く「從上の祖宗、皆な悟底を説く。僮、何んぞ道わざる。」師云く「請う、和尚、某甲に代つて道え。」拙云く「山僧、道不著。」師曰く「恁麼ならば則ち某甲と一般なり。」拙云く「既に是れ一般。甚麼と為してか、山僧、僮を肯わざるや。」師曰く「知音⁽⁵⁾は、消息無し⁽⁶⁾。」拙、渠の語を斬つて曰く「鼻祖⁽⁷⁾の降生、歴代の伝法者は斯の道を保重し、山谷に潜み、三二十年を動ず。霜露の果熟し、龍天⁽⁸⁾推し出す。吾れ去つて後、一十三年、厚く

自は一鉢雲遊、勘檢諸方、如天明・月堂・大歇・拔萃・特峯・月菴・
(曾樹)古劔・石屏・通幻・無著・武藏達西堂・土佐林藏司、凡參五十五員宗
(子介)
(寂庵)
(妙德)
(性達)
(楊林)
(主)
(勇健)
(得勝)
(隊)
(妙奇)
(宗光)
匠、師機辨過人、聲稔湖海、所至虛左、以爲上賓客、問答機語、不遑
槩舉、衲子至今、誦以爲口實、

自ら韜韞⁽⁹⁾し、法を開くこと勿れ。」

- (1) 瑞鹿山。円覚寺の山号。
- (2) ねごと。とるにたりないことば。
- (3) 「不著」しおおせない。うまくひ切れない。
- (4) 代々の禅の祖師方。
- (5) 真に心を知り合つた親友。
- (6) 動静。性況。実態。
- (7) 第一の先祖。物事を始めた人。ここでは釈迦のこと。
- (8) 仏法を擁護する神。
- (9) つつみかくす。

(十) 諸方に歴参する。

是れ自り一鉢雲遊し、諸方を勘檢し、天明、月堂、大歇、拔萃、特峯、
(6)月菴、(7)古劔、(8)石屏、(9)通幻、(10)無著、(11)武藏達西堂、(12)土佐林藏司の如く、凡
そ五十五員の宗匠に参ず。師の機弁、人を過ぎ、声は湖海に稔み、至
る所、左を虚しくして、以て上賓客と爲す。問答の機語、概挙に遑^{いとま}
し。衲子の今に至るまで、誦して以て口実と爲す。

(1) 天明 (不詳) (2) 月堂 (不詳)

(3) 大歇勇健(一一三三―一三八三)臨済宗法灯派。信濃伊那の人。姓は
藤原氏。五才で澄心寺の別山の侍童となり、十五才で紀伊(和歌山県)
の大慈寺に往き、高山慈照(一二六六―一三四三)について受具し、
その法を嗣ぐ。後、建仁寺で修行し、康永二年、高山の寂後、楞嚴
寺に移る。貞和年間(一二四五―一五五〇)に雪村友梅、別伝妙胤に
謁し、また大拙愚と共に、峰翁祖一、中巖円月、孤峯覚明らの名匠

に謁して参究す。大慈寺に住し、また安養寺の一世となる。永徳三年九月四日示寂。正眼智鑑禪師と諡される。

(4) 拔隊得勝(一二三二七―一二三八七)臨濟宗法灯派。俗姓は藤原氏。相模中村の人。幼に父を喪い、長じて疑問をもち、専心端坐したがとけず、二十九才で治福寺の応衡に従って出家する。初め得瓊侍者という山居の僧に従い、後に鎌倉に出て、肯山聞悟に謁し、常陸(茨城県)の復庵宗己に見え、さらに関東各地を遊歴し、諸名宿に参じ、再び得瓊侍者に見え、侍者のすすめで出雲(島根県)雲樹寺の孤峰覚明の室に入り、その法を嗣ぐ。そして、拔隊の号を付される。再び諸国を行脚す。後に甲斐に庵居する。この国の秀庵主は、師に親しく参じて、塩山に向獄寺を開創し、師を第一世に迎えた。太守の武田信成も師の徳をしたい、大いに外護した。嘉慶元年二月二十日示寂。世寿六十一。法臘三十二。慧光大円禪師と諡される。

(5) 特峯妙奇(一二九九―一二三七八)臨濟宗仏光派。生国俗姓不詳。雲巖寺の高峰顕日の法を嗣ぎ、のち元に渡り諸禅宿に参じ、帰朝後、丹波(京都府)横山に隠居した。細川頼之は、万松山慧日寺を丹波に開創し、開山に迎えられる。永和四年三月八日、慧日寺で示寂。世寿八十。

(6) 月庵宗光(一二三六―一二三八九)臨濟宗。俗姓は大江氏。美濃の人。大円寺峰翁祖一のもとに入り、十五才で祝髪し、後、古先印元・夢窓疎石の二老師に参じ、又、南禅寺の竺仙梵僊に師事す。竺仙が建長寺にうつると侍香として仕えた。後、峰翁のもとに帰り、峰翁示寂後、常陸の復庵宗己に謁し、又、大円寺玉林宗璨に待し、さらに

出雲の孤峰覚明をたずね、さらに宗昌寺の大蟲宗岑に参じて法を嗣いだ。貞治六年(一二三六)但馬(兵庫県)の大明寺の開山となり、のちに円通・禅昌など諸寺の開山となった。康応元年三月二十二日示寂。世寿六十四。法臘五十。正統大祖禅師を賜わる。

(7) 古劍智訥(?-一二三二)臨済宗法灯派。孤峰覚明に旨を得て、のち入元する。出雲の雲樹寺に住し、和泉の大雄寺に住す。後村上天皇は、禅法を問い、勅して仏心慧灯国師を賜う。曹洞宗の徒が多く参じ、洞・済の交流が密であった。弘和二年五月〇七日示寂。

(8) 石屏子介(?-一二三八)臨済宗楊岐派破庵派。元より来朝した靈山道徳の法嗣である。入元して各地の宗師に参じ、帰朝して、肥後に永徳寺を開き、更に、大内義弘を檀主に周防に香積寺、長門に龍藏寺を開いた。弘和元年に示寂す。勅諡して仏宗真悟禅師という。

(9) 通幻寂靈(一二三二-一二三九)曹洞宗。豊後(大分県)の人。一説には京都とも。俗姓不詳。母が仏塔に祈願して生まれたという。幼時に父母を失い、世相を嫌って比叡山で出家す。十七才で大光寺の定山祖禅に侍す。後、加賀大乘寺の明峰素哲に参じ、更に総持寺の峨山韶碩に参じ、峨山の法を嗣ぐ。応安元年(一二六八)総持寺に住し、退いて細川頼之に請われ、丹波永沢寺の初祖となり、又総持寺に再住し、又、越前の龍泉寺の開山となる。嘉慶二年(一二八八)総持寺に三たび住し、その門派を通幻派という。明徳二年五月五日、龍泉寺で示寂す。世寿七十。法臘五十二。

(10) 無着妙融(一二三三-一二三九)曹洞宗。大隅(鹿児島県)の人。十九才で日向の大慈寺剛中玄柔について出家受具し、出遊し、肥前万寿

寺に一夏を過し、紀伊興國寺の孤峰覚明に参ず。後、無外円照に参じ、その法を嗣ぐ。又、無外の住した皇徳寺に住し、次に肥前の持福寺に住し、信濃の太守、藤原季高の室に請せられ、肥前の玉林寺を董す。美作の太平、肥前の医王、筑前の大聖、農後の泉福、永泉等の開山となる。明徳四年八月十二日示寂。世寿六十一。真空禪師と諡される。

(11) 武蔵達西堂 (不詳) (12) 土佐林蔵司 (不詳)

(七) 諸寺に住す

後寓紫陽絲嶋正傳精舎、衆稍集、師遁去、自高麗寺游若耶、復入武州秩父、丹氏請董栗尾之興禪、次同郡日奉氏、迎住田村之圓福、又那波大江氏創泉龍、仰以爲第一祖、大拙既化、届一十三回香始忌之辰、夢告青松主者云、上野泉龍、有吾の子、宜贈信衣一頂與之、寤而議送之、師受而一酬拙、爾後學徒益以墳門、師以寛得衆、以嚴持法、堂中常不下五千指、晝夜不去單位、屹然兀坐、人擬之石霜之枯木、至燃頂指以助精進者其衆、

後に紫陽絲嶋の正伝精舎に寓す。衆、稍集まる。師、遁れ去り、高麗寺自り若耶に遊ぶ。復た武州秩父に入る。丹氏、栗尾の興禪に請董し、次いで同郡の日奉氏、田村の円福に迎住す。又、那波の大江氏、泉龍を創し、仰いで以て第一祖と爲す。大拙は既に化す。一十三回の香始忌の辰に届る。夢に青松の主に告げて云く「上野の泉龍に吾が子有り。宜しく信衣一頂を贈り、之を与うべし。」寢めて議し、之を送る。師、受けて拙に一酬す。爾後、学徒益々奔つて以て門を填む。師、寛を以て衆を得、嚴を以て法を持す。堂中、常に五千指を下らず。晝夜、単位を去らず。屹然と兀坐す。人、之を石霜の枯木に擬える。頂指を燃すに至つて、以て精進する者の其の衆を助く。

- (1) 永源寺派、山号瑞応山。滋賀県。 (2) 不詳。現在は廢寺か。
(3) 南禪寺派。山号大宝山。埼玉県。 (4) 円覚寺派。山号万松山。群馬県。

時武州圓岡處女獲奇疾、命在旦夕、忽發狂言、懇親以求師乘炬法語、父母入山、哀號請師、々愍而乃往、與侍僧五人、就座視疾、自寫語一篇與之、女喜起坐、問左右云、座上五僧、孰長老和尚、左右屢指師示之、女惟見侍僧、而不能見師、舉座傾異、爾後女疾日瘥無恙、其親終身盡禮遇師、

同州赤田有一僧、深居習定數年、欲死則談笑、溘然遽旬蘇、率以爲常、

(5) 衣は、仏衣、袈裟。伝法の信を表する証拠として伝授する袈裟のこと。
(6) ひとそろい。

(7) 『景德伝灯録』の石霜慶諸伝に「師止石霜山。二十年間。学衆有方坐不臥屹若株机。天下謂之枯木衆也。」とある。曹洞下、特に石霜の流れをくむ人々を称した。

(三) 武州の処女の奇病を治す

時に武州圓岡の処女、奇疾を獲る。命は旦夕に在り。忽ち狂言を發す。親以て師の乗炬⁽¹⁾の法語を求むることを懇^{うた}える。父母、山に入って、哀号して師に請う。師、愍んで、乃ち侍僧五人と往く。座に就いて疾を視る。自ら語一篇を写して之を与う。女、喜んで坐を起つ。左右に問うて云く「座上の五僧、熟れが長老和尚か。」左右、屢々、師を指して之を示す。女、惟だ侍僧を見て、師を見ることが能わ⁽²⁾ず。挙座のもの、異りを傾ける。爾後、女の疾、日に瘥^いえ、恙^つが無し。其の親、終身尽して師を礼遇す。

(1) たいまつを取って、火葬する時となえる語。

(2) 居合せた者全員。

(三) 僧と問答

同州赤田に一僧有り。深く居して習定すること数年、死を欲して、則

縑素聖之、師延而對牀驗之、萬計不能化、媿赧感從⁽⁵⁾、拜師求法、又有異比丘、每爪頂顫、取塵垢出之、便爲舍利、鉅細爛粲、師召來、以足踐轢其頂、此後舍利不成、

應永^甲春、越後有檀信、屈師施茅、說法竟夏、

歲應永十一年也、干越之後州上田庄田中大義、九旬講勤豆經、此時

上阜之開基覺翁、始見師矣、受戒之四部無數也

秋八月、越中入善藤氏、招師結大會、

預自修冥福、次于館十數日、師聞土庶聚話歎歎、問之則云、邑近改康衢、適當古唐前、神不喜之、過者受禍、復之則凡役萬夫、不復無由避哉、是一邑大患也、師曰、廟有何主、土庶令巫探之、有一峨冠木偶人、師以刀子截去冠、而削圓其顙、背上書法號二字、以安舊祠、自此路人始安、一邑歡動、會畢、按視泉龍赴圓福、

ち談笑す。湍然⁽¹⁾として旬を逾えて蘇える。率、以て常と爲す。縑素、之を聖とす。師、延^ひいて牀に對し之を驗す。万計するも化すること能わず。媿赧^{(3)きたん}感泣し、師を拜して法を求む。又、異なる比丘有り。毎に爪の頂顫の塵垢を取つて之を出し、便ち舍利と爲す。鉅細爛粲⁽⁴⁾。師、召し來つて、足を以て其の頂を踐轢⁽⁵⁾す。此れより後、舍利成らず。

(1)にわかに。たちまち。主として人の死を形容する。

(2)あつさりしている。(3)はじて顔をあからめる。赤面する。恥。

(4)大小まざりあり、美しくあざやかなさま。(5)ふみにじること。

(6) 民衆接化

應永(甲甲)の春、越後に檀信有り。師に屈し、茅に就いて法を説いて夏を竟る。(歳 應永十一年なり。越の後州、上田庄の田中の大義に於て、九旬、豆經を講勤す。此の時、上阜の開基の覺翁、始めて師に見ゆ。受戒の四部は無数なり。)秋八月、越中の善に入る。藤氏、師を招して大会を結ぶ。預め自ら冥福を修し、次いで館^{やど}ること十數日、師、土庶の聚話を聞いて歎歎^{(7)ききよ}す。之に問うて則ち云く「邑は、近く康衢⁽⁸⁾を改む。適々、古唐の前に當る。神、之を喜ばず。過ぎる者は、禍を受く。之を復すれば、則ち凡そ万夫に役す。復せざれば、避けるに由る無し。是れ一邑の大患なり。」師曰く「廟に何れの主か有る。」土庶、巫をして之を探さ含む。一峨冠⁽⁴⁾の木偶人有り。師、刀子を以て冠を截去して、其の顙を削円す。背上に法号の二字を書し、以て旧祠に安ん

ず。此れ自り路人、始めて安んず。一邑の歡動、会し畢る。泉龍⁽⁵⁾を按視して円福に赴く。

- (1) 応永十一年。(二四〇四年)
- (2) すすり泣く。むせび泣き。
- (3) 康は五方、衢は四方。大通りのこと。
- (4) 高いかんむり。
- (5) 上野の泉龍寺。武蔵の円福寺。

(五) 示寂

九月初、感微恙、既而愈、警徒便送葬之具、到初七、哀衆囑後事、且勸其弘道、寫偈訖、置筆坐化、偈曰、七十癡頑、即今離四山、梵天抛筋斗、火裏睡安閑、應永二十一甲午歲九月初七日也、葬于寺之西南隅、^(干時)閱世七十二、坐五十三夏、

九月初め、微恙を感ず。既に愈える。徒を警しめて、送葬の具を備う。初七に到つて、衆を哀めて後事を囑す。且つ、其の弘道を勧め、偈を写し訖る。筆を置いて坐化す。偈に曰く「七十の癡頑、即今、四山を離る。梵天、筋斗を抛ち、火裏に安閑と睡る。」⁽²⁾應永二十一、甲午の歲、九月初七日なり。寺の西南の隅に葬る。世を^ぞ閱えて七十二。五十三夏を坐す。

- (1) 白崖の住した四寺。興禪寺。円福寺。泉龍寺。関興庵。
- (2) 西曆一四一四年

(六) その他、師の徳について

嘗師法味、潜通暗證者如于人、入室傳法人數人、丙午夏、<sup>(應永三十三年也、
没後當十有三回)</sup>也丞相源公追慕師遺德、以聞上、敕賜諡普覺圓光師、<sup>(○應永三十三年六
月九日ノ條參看)</sup>塔曰

師の法味を嘗め、暗證に潜通する者、人に如く。入室伝法の者數人。丙午の夏⁽¹⁾（應永三十三年なり。没後、十有三回に当るなり）丞相の源

法雨、嘗徒游之、辭去者、臨行云、吾執侍幾年、無門關四十八則機緣、望師下語久矣、因循緘封默、不能無憾乎今也、師曰、若欲之、何難之有、汝試取來、僧乃探懷呈之、師信手翻閱、脫口終篇、僧隨鈔割棄去、造但州黑川、呈之月庵、一讀撫几云、不意今日見臨濟烜赫箇孫矣、噩儼中題師真云、幻住千鈞之道、憑一臂而恢弘^(依カ)、爲諸名公所稱譽如此、贊曰、古今人事、惟死不容僞、吾宗聖覽、達眞實不虛之道、而後能透脫生死也、明鑑祖師航海而求得、亦惟是而已、故生前諭師之開法、而滅後授信衣、無有一穗存亡之異焉、師亦以此、正彼僞死之者、如烹金鑪不止鉛、且預自知死期、警徒備葬具、豈僞情妄識之所能獲哉、^(寫)野泉

龍寺本ヲ以テ校ス、

公、師の遺徳を追慕し、以て上に聞え、敕賜して普覺円光禪師と諡す。(応永三十三年六月九ノ条参考) 塔を法雨と曰う。嘗て徒えに遊ぶ。辭去する者、行に臨んで云く「吾れ執侍すること幾年か。『無門関』⁽³⁾四十八則の機縁に、師の下語を望むこと久し。因循緘黙し、今を憾する無きこと能わす。」師曰く「若し之を欲せば、何んぞ之れ有り難し。汝、試みに取り来れ。」僧、乃ち懷を探り之を呈す。師、手を信べて翻閱す。口を脱して篇を終る。償、鈔割に随つて棄^{なま}い去る。但州の黒川⁽⁷⁾に造り、之を月庵に呈す。一読し、几を撫でて云く「不意に今日、臨濟の烜赫の箇孫に見ゆ。」噩儼、中の師の真に題して云く「幻住千鈞の道、一臂に憑つて恢弘す。」諸の名公の称譽する所は、此の如しと爲す。贊して曰く「古今の人事、惟だ死は僞りを容れず。吾が宗の聖賢、眞實不虛の道に達し、而して後に能く生死を透脱す。」明鑑祖師、航海して求得す。亦た惟だ是れなるのみ。故に、生前、師の開法を諭し、而して滅後、信衣を授く。一穗の存亡の異り有ること無し。師、亦た此を以て、正に彼の僞死の者、金鑪を烹て鉛を止^とかざるが如し。且つ、預め自ら死期を知つて、徒を警め、葬具を備う。豈に情の妄識の所能獲を偽らんや。

(1) 西曆一四二六年

(2) 足利義持 (3) 一卷、無門慧開著。紹定二年(一二二九)刊。

(4) 著語及び一転話のこと。 (5) ずるずるべったりの態度で何も言わないこと。

(6) うらみ。 (7) 大明寺(兵庫県朝来郡) 妙心寺派に属す。

(8) 月庵宗光

(9) 周噩(一三五九—一四二八)臨濟宗夢窓派。号は巖中。懶雲子。天府、鳳城とも称す。春屋妙葩について祝髪受戒す。のちに諸方を遍参し、春屋のもとに帰り嗣法す。天寧寺に住し、足利義持の帰依を受け、のちに相国寺の二十七世となり、又、天竜、南禅の両寺にも住す。更に相国寺に再住し、正長元年六月二十六日示寂。世寿七十。智海大珠禅師を諡される。

〔延寶傳燈錄〕二十七
臨濟宗

延宝伝灯録(二十七、臨濟宗)

建長大拙祖能禪師法嗣

建長大拙祖能禪師の法嗣

(一) 誕生

上野州萬松山龍寺白崖寶生禪師、河内人、生于橘族、

上野州、万松山泉龍寺の白崖びやくがい宝生禪師。河内の人。橘の族に生まる。

(二) 出家

將求得度、躋金剛峰、至禿坂、逢龐眉僧、曰、何往、師曰、我欲出家、僧曰、愛線牽強、佛道懸曠、不有猛利大心、焉能修行、若測求真法、宜入禪門、毋滯于此、揖去、師已落髮、遊方鎌倉、

將に得度を求めんとし、金剛峯に躋のぼる。禿坂に至って、龐眉の僧に逢つて曰く「何れにか往く。」師曰く「我れ出家を欲ねがう。」僧曰く「愛線は牽強、仏道は懸曠。猛利の大有らずんば、焉んぞ能しく修行せん。若し眞の法を求めんと欲せば、宜しく禪門に入るべし。此に滯ること

母れ。揖し去る。師、已に落髮し、鎌倉に遊方す。

(三) 清隱寺の至一に参ず

就清隱寺至一法師、受具足戒、

清隱寺の至一法師に就いて具足戒を受く。

(四) 安房、清澄山の虚空藏菩薩に参詣す

禮房州虚空藏菩薩、三七日中祈求得法因縁、適與一老僧同宿、孰視禿坂所邂逅僧也、感喜交集、

房州の虚空藏菩薩を礼す。三八日中、得法の因縁を祈求す。適々、一老僧と同宿す。孰視すると、禿坂の邂逅する所の僧なり。感喜交も集む。

(五) 永源寺の元光に参ず

僧指見永源寂室和尚、室一面器重、一日將赴粉里、道過吉野、聞風憂竹聲、恍爾有省、時年二十一、抃躍告室、室日、爾宜保任、以成其器、慎勿造次、

僧、指して永源の寂室和尚に見ゆ。室、一面し器重す。一日、將に粉里に赴かんとす。道、吉野を過ぐ。風、竹を憂るの声を聞いて、恍爾として省有り。時に年は二十一。抃躍して室に告ぐ。室曰く「爾、宜しく保任し、以て其の器を成すべし。慎んで造次すること勿れ。

(六) 円心に参ず

及室歸滅、掛錫越之龍溪、参月堂心歲餘、堂亦化去、悵然失望、

室の歸滅するに及んで、越の龍溪に掛錫し、月堂心に参ず。歳余にして、堂亦た化去す。悵然として望を失す。

會大拙歸自元國、在上野吉祥寺、弘天目道、(中峰明本)師聞得若渴驥赴水、便往呈所解、拙不肯、令看德山托鉢話、宴坐一室、不出戶者三載、大拙赴圓覺請、逆叩途中、機語不契、

辭入日光山、誓曰、不明大事、再不下山、早間煮粥、粥鍋爆裂、當下豁然大悟、作偈曰、去年廣澤間房裏、今歲日光巖窟邊、不覺同生同死處、孤峰拍手嘯青天、

趨告大拙、拙印可、且曰、古人得法之後、潛處山谷、保重斯道、及霜露果熟、人天推轂、不得已而應、汝自今而後一十三年、深自韜晦、慎勿開法、

(七) 上野、吉祥寺の祖能に参ず

会に大拙、元の国より帰る。上野の吉祥寺に在って、天目の道を弘む。師、聞き得て、渴驥、水に赴くが若し。便ち往きて所解を呈す。拙、肯わず。德山托鉢の話を看せしむ。一室に宴坐して、戸を出でざるこ
と三載。大拙、円覚の請に赴く。途中、逆叩す。機語契わず。

(八) 下野、日光山に入る

辞して日光山に入る。大事を明らめずんば、再び山を下らず。早間、粥を煮る。粥鍋爆裂す。当下に豁然として大悟す。偈を作つて曰く「去年の広沢、間房の裏、今歳、日光巖窟の辺。覚えず、同生同死の処、孤峰に手を拍つて、青天に嘯く。」

(九) 円覚寺で祖能の印可を受ける

趨きて大拙に告ぐ。拙、印可す。且つ曰く「古人、得法の後、山谷に潜処し、斬の道を保重す。霜露、果熟し、人天、轂を推すに及んで、已むを得ずして応ず。汝、今自り後、一十三年、深く自ら韜晦し、慎んで法を開くこと勿れ。」

從此一鉢雲遊、勘辨諸方、歷見拔遂勝・特峰奇・月菴光・通幻靈・無著融・達西堂・林藏主等五十五員知識、

(十) 諸方に歴参する

此れ従り、一鉢雲遊し、諸法を勘弁す。拔隊勝、特峰奇、月菴光、通幻靈、無著融、達西堂、林藏主等、五十五員の知識に歴見す。

(十一) 諸寺に住す

後抵武州、受請佳興禪、遷圓福、那波大江氏創泉龍寺、請爲開山第一祖、法席雄盛、衆盈五千指、

後に、武州に抵^{いた}り、請に受けて興禪に住し、円福に遷る。那波の大江氏、泉龍寺を創し、請うて開山第一祖と爲す。法席は雄盛。衆、五千指に盈^みつ。

(十二) 武州の処女の奇病に治す

有一處女、獲奇疾 命在旦夕、忽發狂索師法語、即書與之、其病立瘳、

一処女有り。奇疾を獲る。命は旦夕に在り。忽ち狂を發す。師の法語を索む。即ち書して与う。其の病、立瘳す。

(十三) 僧との問答

有僧深居習定、談笑之間、乍死乍生、或逾旬而蘇、師對坐勘驗、遂下能化、媿謝歸投、又一比丘自搔頭顱、出設利羅、師待渠來、一蹈蹈倒、爾後不現、

僧有り。深居し習定し、談笑の間、乍ち死し、乍ち生ず。或は旬を逾えて蘇える。師、対坐し勘驗す。遂に化すること能わす。媿謝し歸投す。又、一比丘、自ら頭顱を搔き、設利羅を出す。師、渠の來たるを待ち、一踏に踏倒す。爾後現われず。

越中檀越藤氏、設大會齋、請師陞座爲法、爲留旬餘、邑有神祠、安峨冠木偶人、過祠前者、多爲神所祟、師削冠圓頂、背書法號、往來始安、其異跡不一、

(四) 民衆接化

越中の檀越の藤氏、大会齋を設け、師を陞座し、說法するを請う。爲留すること旬余。邑に神祠有り。峨冠の木偶人を安んず。祠の前を過ぎる者、多く神のために祟^{たた}らる。師、冠を削り、頂を円くし、背に法号を書す。往来、始めて安んず、其の異跡は一ならず。

(五) 示寂

師在圓福示微疾、俄集衆囑後事、書偈曰、七十二癡頑、卽今離四山、梵天拋筋斗、火裏睡安間、置筆而化、皆應永二十一年九月七日也、春秋七十二、夏臘五十三、

師、円福に在つて、微疾を示す。俄かに衆を集めて後事を囑す。偈を書して曰く「七十二の痴頑、即今、四山を離る。梵天、筋斗を抛ち、火裏に安間と睡る。」筆を置いて化す。時に応永二十一年九月七日なり。春秋七十二。夏臘五十三。

(六) その他 師の徳について

門人葬全身、樹塔曰法雨、後過十四年、丞相源公、追慕師徳、聞于朝廷、賜諡曰普覺圓光禪師、

○本朝高僧傳異事ナシ、

門人、全身を葬り、塔を樹て、法雨と曰う。後、十四年を過ぎ、丞相の源公、師の徳を追慕す。朝廷に聞え、諡を賜わる。普覺円光禪師と曰う。

○本朝高僧伝、異事ナシ。

〔扶桑禪林僧寶傳〕八

泉龍寺白崖生禪師傳○傳文異事ナキヲ以テ略ス

贊曰、朝廷嘗賜敕書曰、上野州泉龍開山白崖和尚者、明鑑眞子、弘辨的孫、提幻住三傳之印、躡隱山千歲之踪、群衲趨風、西方仰德、豈非濁世優鉢曇、末運光明幢耶、予恭讀此章、知其爲本色住山人也、

〔扶桑禪林僧寶傳〕八

泉龍寺、白崖生禪師傳 ○伝文、異事ナキヨ以テ略ス

贊して曰く「朝廷、嘗つて敕書を賜わつて曰く『上野州、泉龍の開山、白崖和尚は、明鑑の眞子、弘辨⁽¹⁾的孫なり。幻住三伝の印を提げて、隱山千歳の踪を躡む。群衲、風に趨いて、西方は徳を仰ぐ。豈に、濁世の優鉢曇、末は光明の幢を運ぶに非ずや。予、恭いて此の章を讀んで、其の本色の住山人と爲すを知る。』と」

(1)雪巖祖欽(？)一二八七)臨済宋楊岐派。法欽とも。浙江省に生まれる。五才で沙弥、十六才で剃髮、十八才で行脚す。諸師に歴参し、後、徑山の無準師範の法を嗣ぐ。又、諸寺に住し、至元二十四年示寂す。世寿七十。

(法系)

雪巖祖欽―高峰原妙―中峰明本―千巖元長―大拙祖能―白崖宝生